理　事　長　所　信

第４８代理事長　藤井　浩幸

無関心社会からの脱却
自分がやらねば誰がやる！
確固たる当事者意識と諦めない実践力を持った
ＪＡＹＣＥＥによる活力ある故郷（ふるさと）の再興

～はじめに～

昨年の３月 11 日 14 時 46 分に発災した東日本大震災とそれに起因する原子力発電所の事故によって我が故郷「日本」は言い知れぬ恐怖と深い悲しみに包まれた。そして今、多くの人々がその心の傷が癒えぬまま生きるために、愛する故郷のために必死に復旧から復興へと少しずつ歩みを進めている。こうした姿や実情を目の当たりにし、皮肉にも無関心や無気力感が蔓延する今の日本社会の空気が大きく変わったように感じた。同時に、自分自身においても自身の生き方や家族と会社の将来、また生まれ育った故郷「上越」の現状や未来に対して今まで以上に想いと関心が高まり、この世に生かされている者として、故郷の未来を背負う責任世代として、確固たる当事者意識を持ち向き合っていくことが大切であると強く感じた。

～大局観を持って局所に臨め、よそ者視点が地域を変える～

2007 年度、私は日本 JC 本会の日本経済探究委員会へ副委員長として出向した。そして、その翌々年となる 2009 年度、同じく日本 JC 本会の真の経済活動探求委員会へ委員長として出向した。この日本 JC 本会への２回の出向は、当時の上越 JC においては前例も少なく極めて珍しかったことであり、多くの諸先輩からの多大なるご尽力で何とか実現したものであった。それだけに相当のプレッシャーの中で、上越 JC の看板に傷を付けまいと、時間と財布に気を配りつつも全国各地を飛び回り必死に JC 運動を推進した。そうした中で、訪れた各地域の特色や課題、また、そこに住まう人々の人間性や考え方、更には LOM や JAYCEE が抱える悩み事などに触れ、地元に居るだけではなかなか知り得ない多くの気づきや出会いを得る事が出来た。同時にそれらを上越地域の実情と重ね合わせることで、地

域固有の魅力やまちづくりの在り方などについて今までとは全く異なった新しい視点での価値観が数多く生まれた。この様に「他を知ることで己を知る」といったことは実社会ではもちろんのこと、JC 運動を推進していく中でも極めて大切なものであり、地域を客観的に捉える「よそ者の視点」こそが、上越地域の活性化の鍵を握っていると考えている。

～地域に頼られる自立した並行在来線を考える～

今から約 3 年後の 2015 年の春、北陸新幹線「長野～金沢間」が延伸開通する。これにより、我が上越地域の利便性は飛躍的に向上すると共に、他地域との交流人口の増加や首都圏とのビジネスチャンスの拡大など様々なメリットが見込まれる。しかし一方では、より魅力のある地域へ「人・物・金・情報」が吸い取られてしまうストロー現象や上越地域の旧来からの商業圏と新幹線の新駅設置によって出来る新たな商業圏とのバランスなど不安視されている事案も数多くある。その中でも取り分け問題視されていることが、北陸新幹線の軌道と並行して走る在来線（信越本線・北陸本線）が新幹線の開通に伴って JR 東日本から第 3 セクターへ経営分離される、いわゆる並行在来線問題である。これは、経営分離されることそのものが問題ではなく、分離された後のことが大きな課題で、全国的に見ても第 3 セクターの経営が成功している事例は少なく、多くは路線の維持のために自治体が巨額の負担を強いられ、結果として廃線や列車本数の減数を余儀なくされている。しかし、これは学生やお年寄りなど交通弱者と呼ばれる人々にとっては死活問題であると共に、旧来の駅前商店街の在り方や財政負担の観点など上越地域全体の近未来を考えていく上でも、極めて重要な課題の一つであると認識している。だからこそ、その方向性や打開策を今から模索しておくこと、つまり自立した地域に頼られる並行在来線のあり方について、先進事例や関係する文献などの検証はもちろんのこと、有識者との連携や行政の枠組みを越える JC のネットワークを活かしながら、青年らしい自由な発想と行動力をもって探求していくことが大切だと考えている。そして、そこで得られた一定の成果を地域へ力強く発信することで無関心層への意識高揚を図ると共に 3 年後に向けた次のステージへ繋げていくことが、地域の若きリーダーを自負する我々JAYCEE の使命と認識している。

～地域から愛され、地域に誇れるオクトーバーフェスト IN はすまつり～

我々のスポンサーJC である長岡 JC と言えば「長岡大花火大会」、姉妹関係にある上田 JC では市民祭りである「上田わっしょい」、友好関係である米沢 JC では「上杉祭り」。この様に各地青年会議所には、その LOM を代表する祭りや継続事業があり、それぞれにおいてその地域の JAYCEE が深く関与している。では、上越 JC の代名詞と言えば何があるだ

ろう。

上越 JC が誕生して今年で 48 年目。会員数も 129 名(2011 年 11 月現在)を数え全国的にも大きなクラスに位置する。しかし、LOM を代表する祭りや事業となると、残念ながらほとんど見当たらない。この状況をどの様に捉えるのか、単年度制という JC の枠組みの中では単純に評価することは難しく、事業ありきであってはならないことは十分に理解しているが、少なくとも地域の方々とのコミュニケーションや協働の機会が少ないことは、地域との関わりを意識している JC としては少し寂しいと感じている。また、JC 運動の発信力と影響力や上越 JC への認知度の向上の観点からも、その様な機会が必要だと考えている。その機会と成り得るものの一つとして今年で 5 年目を迎える「オクトーバーフェスト IN はすまつり」があると考えている。これは、東洋一と呼ばれる高田城址公園内のはすを広く発信するために開催される「上越はすまつり」を更に盛り上げるべく、2008 年度に上越 JC が主体となってスタートさせた事業であったが、様々な事情の中でその運営については当初から実行委員会に移管しており、上越 JC との関係が曖昧となっていた。これを今一度、上越 JC が責任主体となり、これまでの経験や人間関係を大切にしつつ、新たに公益性と単年度制における継続性を意識した中で「地域から愛され、地域に誇れるシンボリックな事業」としての礎をしっかりと再構築することが、今後の上越 JC はもとより上越地域の活性化においても重要な位置付けであると捉えている。

～夢は生きる力、夢見る子どもが未来を創る～

「子どもが夢を持たなくなった」と言われて久しいが、年々、その傾向は強くなってきているのではないかと感じている。実際、ある地域の小学生に向けたアンケート結果でも、約半数の子ども達が「特に夢がない」「やりたいことが別に無い」と回答し、この割合は小学生よりも中学生の方が多くなったそうだ。この結果が必ずしもすべての地域や子ども達に当てはまるとは言うつもりは毛頭無いが、全く無視できるものでもないとも思っている。では、なぜこの様な無関心で無気力な状態に陥ってしまったのか。その理由は簡単で、我々大人達が日々の現実に疲れ自分自身の夢すらを描くことができなくなり、同時に子ども達に夢を語ることができなくなってしまったからではないだろうか。また、そんな大人達が子ども達の描く夢に対して、「どうせ無理だから」「現実はそんなに甘くない」とブレーキをかけてしまうことが大きな要因になっていると感じている。このような閉塞感に満ちた苦しい状況を打破することが、今、求められているのではないだろうか。しかし、大人がそんな議論をしている間にも子ども達は日々成長し続けている。であるならば、一刻も早く行動を起こすことが必要で、そのために我々JAYCEE が自ら率先して子ども達と向き合い「夢を描くことの大切さ」や「夢に向って努力すること」について、日々の経済活動から得る実体験や過去の経験談を基に熱く伝えることが大切だと考えている。また、そのよ

うな環境づくりを広く進めていくことで、夢や希望に前向きな子ども達がこの地域に溢れ、やがてはこの地域の発展、この国の未来を明るくすることに繋がると信じている。

～ポジティブな大人たちから変わる教育～

「子どもは大人の背中を見て育つ」という言葉がある通り、子どもの成長には大人の存在が大きく影響する。そのため、教育のあり方を語る上では親や教師についての議論が欠かせない。しかし、その議論の中身となると「先生が悪い、いや親が悪い」と相手のあら探しに終始してしまうケースが多いとよく耳にする。また、各メディアにおいても「モンスターペアレントの振る舞い」や「不祥事を起こした教師」といったダメな大人の姿ばかりを取り上げた無責任でネガティブな報道が目立っていると感じている。だが、世の中、本当にダメな親や教師ばかりなのだろうか。いや、私は違うと思う。むしろ、子ども達を心の底から愛し、子ども達と真摯に向き合う魅力的な教師や厳しさと優しさを併せ持った愛情あふれる親の方が大半ではないだろうか。そんな頑張っている大人たちにこそ関心を向け、その取り組みや姿勢を広く周知すること、言い換えれば、共感から自発的変化を促すことで教育の現場や家庭環境を変えられるのではないかと思っている。人間誰しも、批判的な意見や悪い事例ばかりを見聞きすれば、やる気を失い反発心だけが残る。反面、建設的な意見や素晴らしく感動・共感する事例を見聞きすれば、自分も真似をしてみたくなったり、もっと頑張ろうといった向上心が自然と沸き立ったりするものだ。私は、ポジティブな発想からポジティブな変化が生まれることを信じ、そこから今の教育を考えていくことが大切だと考えている。

～コミュニティスクール IN 上越、いま JAYCEE に出来ること～

文部科学省が今から約 7 年前の 2004 年 9 月から新しい公立学校の運営の仕組みとして導入した「コミュニティスクール（学校運営協議会制度）」をご存知だろうか。これは、保護者や地域の方々の声を学校運営に直接反映させ、保護者・地域・学校・教育委員会が一体となってより良い学校を作り上げていくことを目指すものである。簡単に言えば、地域の関係者が学校運営を行う様なものであり、2008 年度に上越 JC で取り組んだ、PTA と地域住民（Commuity）が手を携え地域のこども達は地域で育てることを目指した PTCA 事業に近いものであると認識している。今、このコミュニティスクールを上越の教育現場に導入しようという動きが関係する行政から広がりつつあり、既に上越 JC に対しても幾つかの投げ掛けが届いている。これは、健全な青少年の育成を目的とした教育関連事業に長年取り組んできた上越 JC や、地域の PTA 活動などでも活躍している JAYCEE にとっては絶好

の機会だと捉えている。この貴重な機会を我々の立ち位置を見失うことなく、多くの関係者と連携を図りながらポジティブな発想で深く関与し、地域を挙げて子ども達の健全育成に繋がる環境づくりに努めたいと考えている。

～企業に求められる８つの満足～

冒頭でも述べた通り 2009 年度、私は日本 JC 本会へ出向し「真の経済活動探求委員会」といういわゆるビジネス系の委員長を務めた。その際「JC 青経塾：あなたが変われば企業も変わる～JAYCEE だからできること～」という指導者育成プログラムを全国から集まった仲間と共に開発し、全国各地の JAYCEE に向けて実践した。これは、拝金主義が台頭しモラル低下が著しい昨今の経済情勢の中で、企業として、経営者として、社員として意識しておくべき基本的要素を「社員満足（ES）」「家族満足(FS)」「関係者満足(RS)」「顧客満足(CS)」「地域満足(SS)」「環境満足(ES)」「組織満足(OS)」「自分満足(SS)」の８つのカテゴリーに分け、その満足度（8-Satisfaction）を現状からいかに向上させていくべきかを具体的に考え、実践に活かしていくためにシュミレーションする内容である。もっと言えば、様々な関わりの中で存在するいち企業が、それらにいかに関心を払っていくか、社会とどの様に関わっていくかが企業の存続と繁栄の鍵を握っていることに気付くものである。これについては、既に意識し実践されている企業も多くあるとは思うが、この考え方をキーワードとした学びの場を地域経済の若きリーダーを自負する我々JAYCEE が率先して創り出すと共に多くの企業人と学びを深め共有し、各々の企業における人財育成や経営資質の向上に活かしていくことが、企業の発展はもとより地域経済の活性化に繋がっていくと考えている。

～中小企業の活性化、会社あっての JC だから～

経済のグローバル化、円高、デフレなど様々な要因により経済を取り巻く環境が年々厳しさを増す中、多くの企業が業績の低迷に悩み苦しんでいるのではないだろうか。中でも、取り分け日本経済を下支えしている中小企業においては厳しい局面を迎えており、この上越地域も決して例外ではないと理解している。この様な状況において、地域経済に密着している我々JAYCEE が地域経済の活性化に対して、企業情報の受発信の場や異業種も含めた企業間交流の場を創出するなど、実態を踏まえ積極的に行動を起こすべきであると考えている。これについては過去に「JC ではビジネスの話はタブー」と言われていた経緯や、青年会議所がやるべきことなのかといった見解もあることは理解しているが、我々は会社があるからこそ JC 運動に取り組むことが出来ることも事実である。また、青年経済人でも

ある我々が本来もっとも得意とする分野で、その経験やネットワークを活かし、地域経済の活性化に具体的に関与していくことが、雇用の安定化や納税の義務といった社会的責任を果たしていくことにも繋がり、ひいては「明るい豊かな社会の実現」に通じると信じている。

～運動は数なり　数は力なり～

「会員減少が止まらない」「会員拡大が進まない」

昨今、全国の青年会議所からこんな声が頻繁に聞こえてくる。事実、全国の会員数は最盛期だった 1990 年代の半数程度まで激減しており、LOM そのものが消滅してしまった事例もある。これについては、少なからず上越 JC も例外ではないと感じている。

上越 JC には現在、129 名(2011 年 11 月現在)の会員がいる。しかし、私の卒業年度となる 2014 年度までには 66 名が卒業する予定である。言い換えれば、現状の上越 JC の規模や発信力を維持していくには本年度も含めた今後 3 年間で 66 名、年平均 22 名以上の新入会員を迎え入れることが最低条件であり、更なる発展を考えれば今年度で 30 名以上の新入会員を迎え入れなければならない。この数字は近年の会員拡大の実績や厳しい経済情勢などを鑑みるとかなり高いハードルではあるが、誠意と熱意を大切に戦略的且つ能動的に LOM が一丸となって取り組めば必ず達成できるものだと信じている。

そしてもう一つ、同時に考えておかなければならないことがある。それは、会員の資質向上である。仮に今の会員数の現状維持が叶ったとしても、2015 年度には JC 在籍 10 年以上の者が全体の 1 割程度、5 年未満が 6 割程度となることが分かっている。このため多少、経験年数が浅くとも今のうちから意図的に LOM の役員や理事などの要職を経験する機会や出向できる環境を創り出すことが必要であると考えている。また、在籍年数が少ないメンバーでも限られた期間で少しでも濃密な人間関係を構築できる機会や公益性の重視によって以前より希薄になりつつあるメンバー同士の友情を深める機会を積極的に創出することで、3 年後の LOM の屋台骨となり得る地域からもメンバーからも頼られる JAYCEE の育成に全力をあげたいと考えている。

～新入会員と向き合う、素晴らしい運動は素晴らしい人間関係から～

「まちづくりに興味があった」「人脈をつくりたい」「先輩から強引に勧められた」

青年会議所に入会するきっかけは人それぞれだ。私の場合、当時の会社の厳しい経営状況を改善するべく「仕事を求めて」2002 年 2 月に上越 JC に入会した。しかし、実際は「JC ではビジネスの話はタブーだから」と言われ全くといって良いほど仕事には結びつかず、

JC を何もかも思い通りにいかないことだらけで一人で腐っていた。そんな駄目でどうしようもない私を新入会員が入会 1 年目に配属されるオリエンテーション委員会の当時の委員長である故池亀一栄先輩をはじめとするスタッフ、同期入会のメンバーがいつも支えてくれたお陰で初年度を何とか終えることができ、その出発点があったからこそ今日の私がある。そして、その繋がりは 11 年経った今でもしっかりと生き続けており、私の人生を豊かにしてくれている。こんな素晴らしい出会いや経験をこれから迎える新入会員にも是非とも体感してもらいたいと思っている。また、今は厳しい経済状況の中にあり、決してＪＣ運動を推進するには最適な環境ではないが、せっかく入会したのだからこれをチャンスと捉え、明るい豊かな社会の実現に向けた多くの運動や活動に沢山の仲間と共に積極果敢に挑戦し、視野を広げ認識を深め自分自身を今以上に磨き上げることで、JAYCEE としても社会人としても大きく成長を遂げてほしいと考えている。それが、「個人の修練、社会への奉仕、世界との友情」の JC 三信条に通ずるところであり、青年の最大の学び舎と言われている青年会議所の最大の魅力だと信じている。

～リスクとリターンからみる JC～

我々JAYCEE は日常生活の他に多くの時間とお金、そして膨大な労力を費やし JC 運動の推進のため活動している。これは、長期化している厳しい経済情勢や昨年、発災した東日本大震災に起因する様々な障害が発生している状況下においては、全く別世界の話のようで一般にはなかなか理解し難い人も多いだろう。しかし、日常生活と JC 活動の関係の中で費やす時間・お金・労力などを日常生活のリスクと置き換えた場合、リスクを冒したからこそ得るもの（リターン）があり、例外はあるものの基本的にはリスクの大きさに比例してリターンの大きさが決まるのが JC であると考えている。事実、私自身も 10 年間を超える JC 在籍期間の中で相応のリスクを冒してきた反面、様々なところへ積極的に参画したことで多くの方々との出会いや尊い経験を得たと共に一人の人間として大きく成長することができ、素晴らしいリターンを得たと実感している。この様なことは、大小問わず多くのメンバーも既に体感していることであろうし、今後も JC に関わるには決して恵まれた環境とはならずとも悲観的にならず、メンバー各々が高い志を持ち出来る範囲で前向きにリスクと向き合っていくことが自己成長を成し遂げる上でもとても大切だと思っている。また、上越 JC という組織運営においても各メンバーのリスクに一定の配慮をしつつも、単にリスクだけに注目するのではなくその先にあるリターンをしっかりと見据え前向きに諸事に取り組みたいと考えている。

～公益社団法人へ移行するにあたり～

公益法人制度改革の施行に伴い、今年度中に「社団法人　上越青年会議所」はその 47 年の歴史に一旦幕を閉じ、新たな法人格を取得し「公益社団法人　上越青年会議所」として再出発する予定である。これは「明るい豊かな社会の実現」を標榜し、地域に根差した運動を広く展開する JC の趣旨からすれば何ら不思議なことではなく、行政や他団体からも今まで以上に大きな負託と信頼を得る組織への転換であると捉えている。しかし、一方では実務上において各種運動や事業における公益性や公開性が今まで以上に強く求められ、会計上においても公益事業比率の 50%以上の確保や内部留保の解消などより高い透明性が必要となる。また現行では一旦、公益社団法人を選択した以上は後戻りが出来ないルールとなっており、認定基準を維持できなくなった時点で LOM の財産をすべて処分の上、解散しなければならない。従って、単なる名称変更と考えるのではなく、将来に亘って相応の覚悟を持って我々は臨まなければならないと感じている。取り分け、公益事業比率 50%の確保においては、今後さらに進むと思われる会員の減少傾向の中で、財務体質の強化を図ることが極めて重要で、この対処の一つとして、今まで定款上では規定さていたが実態がほとんどなかった「賛助会員制度」の導入も視野に入れ、今まで以上に安定的な組織運営に取り組んでいかなければならない。

～戦略性を持った情報発信を考える～

青年会議所において各種運動や事業を展開する際、必ずと言って良いほど告知や募集活動が必要となるが、今までその媒体として新聞や雑誌、また、ラジオやテレビといった様々なメディアを活用してきた。しかし、実際は各事業単位での時間的にも限られた告知では思った通りの効果を得ることが難しく、事業目的を達することよりも参加員数計画を満たすこと、いわゆる人集めに終始してしまう本末転倒なケースが近年増えてきているように感じる。これは、公益法人制度改革に伴う公益性最重視・外部への発信力の強化の観点からやむを得ない部分もあるとは思うが、今後もその方向性が変わらない以上、フェイスブックといった新しい発信媒体の活用も含め、戦略性を持った情報発信を展開することが必要だと考えている。同時に、各事業単位や委員会単位といった縦割りで限定的な枠組みではなく、組織として横断的に一貫性を持って年間を通して定期的に情報発信するなど、告知や募集に関わる労力や費用負担を集約化し軽減していくことが重要だと捉えている。また、我々の志や考え方に共感して頂ける諸団体や個人と日常的に有機的なネットワークを構築し、良好な関係の中でお互いの情報交換を通じ相乗的な発展を目指すことがひいては上越地域の活性化にも繋がると信じている。

～ただ実践あるのみ～

昨年度、開催されたサマーコンファレンスのあるセミナーにおいて、とある首長が「JCさんのプレゼンは大変素晴らしいといつも感心していますが、あとは実際にどう行動するかが必要ですね…。」と少し皮肉交じりにコメントされた。正直、この種の指摘は以前より様々な場面で耳にすることがあり、学者や評論家ではない運動家としての JAYCEE の実践力が問われていると捉えている。よって、今年度において私は担当例会を原則として開催しない方向で進めたいと考えている。これは、決して過去の方式や担当例会の内容が悪いと言うことでは全くなく、講演会や勉強会といった座学が主流の近年の担当例会においては、我々JAYCEE が学ぶべきことは既に一定値満足していると感じているからだ。もっと言えば、どんなに素晴らしい本を読んでも、どんなに優秀な方の話を聞いても、そこで学び得たものを実践し体現できなければ全く意味がなく、今、我々は学びを蓄積する段階から過去に学び得たものを基とし、自らの行動から実践的事業を通じて広く主張すべき段階に移ったと認識している。

「やってみせ　言って聞かせて　させてみる　ほめてやらねば　人は動かじ」

これは、新潟県の偉人の一人であり、大日本帝国軍の元帥海軍大将を務めた「山本五十六」氏の名言の一つである。何をおいてもまずは自らが信念に基づき行動し、その背中で語り示すことで人心を動かしていくことが、今の我々が目指すべき姿勢だと強く感じている。

～結びに～

マザーテレサの言葉に「愛の反対は憎しみではなく、無関心である。」といったものがある。

愛する家族
愛する仲間
愛する会社
愛する地域
そして、愛する自分。

2012 年度、我々JAYCEE が故郷「上越」の諸課題に対して積極的に関心を払い、この世に生かされている者として、故郷の未来を背負う責任世代として、「自分がやらねば誰がやる！」といった確固たる当事者意識と気概を持って、能動的且つ実践的に諦めず取り組もうではないか。それこそが、愛する我が故郷「上越」を活力ある地域へと導き、ひいては東日本大震災とそれに起因する原子力発電所の事故によってひどく傷付いてしまった愛する故郷「日本国」の復興にも結ぶと固く信じている。